

パパが歩いていること

山口 愛結

きよ年の父の日のことはぜったい一生わすれられません。

「パパが今日、二回もころんだんだって。何だろうね。とにかく、いそいでかえるよ。」
母が言いました。

いえにかえると、父はふとんにあおむけになっていて、こう言いました。

「うごけなくなっちゃった。」

母はびょういんにでん話をして、父をかついで車にのせました。わたしはだまってついていきました。

あとからおねえちゃんがびょういんにかけつけましたが、そのときはもう、父はだらんとしていました。おねえちゃんとわたしはタクシーでいえにかえて、父と母はきゆうきゆう車でほかのびょういんへ行きました。

〃のうこうそく〃というびょう気でした。

母はそのとき、おいしゃさんから、

「さいあくの場合(しぬこと)も考えておいてください。」

「もしなおつても車いす。どんなにがんばってもつえはのこりますよ。」

と言われていたそうです。

母はわたしたちが学校にいつている間、何でも大きな声で泣いていたそうです。

さいしょは、お見まいに行っても、父は赤ちゃんみたいに何もしゃべらないし、わたしがよんでもこつちをむくこともできませんでした。それでも、わたしたちは父の手や足をさすりました。何もかんじないらしいけれど、一生けんめいさすりました。

父はだんだん元気になってきました。ある日ゆびがうごいて、ある日すわれるようになって、ある日、立てるようになりました。そして、とうとうある日、父は、つえにたよりながら、ゆっくりゆっくり歩けるようになりました。

一年たった今。父のつえは下駄箱のおくにしまったままです。それどころか毎朝近所の遊歩道を走っています。電車にのってしごとへ行きます。わたしをだっこしてくれます。

「次は、かた車が目ひょうなんだ。」

「かぞくをおいて、しぬわけにいかないよ。」
と、父はにこにこわらいます。

その〴〵思い〴〵で、苦しいリハビリをがんばってくれたと思うと、心のそこから父に「ありがとう」を言いたいです。

それに、あきらめないでがんばったら何でもできるといふことを、証明してくれました。歩くことや話すことはあたり前ではなくて、すてきな〴〵きせき〴〵なんだということも教えてくださいました。

ありがとう、パパ。パパ、ありがとう。